

争点を恣意的に狭める裁判官を厳しく批判！

●富山訴訟第12回口頭弁論報告 一原告団長・和田 廣治



さる1月11日に富山地裁で、志賀原発株主差止め訴訟（富山訴訟）第12回口頭弁論が行われました。当日は、1月の富山では極めてまれな快晴で、雪を抱いた剣岳などの立山連峰が裁判所からもくっきり見えました。こんなきれいな立山を志賀原発の放射能で汚してはいけない、そのためにも一日も早く志賀原発廃炉を実現したいと、立山の神様にもお祈りしました。

今回も富山・石川県内から原告や命のネットなど支援者の皆さんが富山地裁に集まり、全員

が傍聴席に入ることができました。何かとお忙しい中、駆け付けていただいた皆様や、メッセージなどお心を寄せていただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

《争点を恣意的に限定した裁判長を原告側が痛烈に批判》

今回の法廷では、原告側弁護団が今回提出の第26準備書面を要約陳述し、前々回に裁判所が示した「会社の全資産（北電は1兆5000億円）でも補填できない損害が想定されない限り提訴できない」との見解に対して、学説や判例などに反して原告の申立て要件を厳しく限定しているなどと厳しく批判して、再考を求めました。

それに対して裁判長が改めて同じ説明をしましたが、原告弁護団が「会社の全資産とする根拠は何か」などの問題点をすどく指摘し、裁判長も「検討する」と言わざるを得ませんでした。

一方被告側は、原告側が前回提出した第24準備書面への反論として準備書面（10）を提出しましたが、口頭では説明しませんでした。（写真-弁論の説明をする岩淵弁護団長）

《次回も原告側は積極的に主張を展開の予定》

次回の第13回口頭弁論で原告側は、新規制基準の問題等の第27・28準備書面を提出するとともに、証人尋問など今後の立証計画の大枠を提出するなど、裁判所に対して積極的に主張を展開する予定です。次回は、3月20日です。

○第13回口頭弁論にもぜひご参集下さい！

- | | | |
|-----------|---------------|-------|
| ◆第13回口頭弁論 | 3月20日（月）午後3時～ | *いずれも |
| ◆第14回口頭弁論 | 5月31日（水）午後3時～ | 1号法廷 |

原発復帰の号令！現実には原発廃棄へ

◆豊橋市・田中 良明（『原発雑考』412号より転載）

昨年8月に岸田首相が、既設原発の再稼働促進と運転期間延長、および原発の新增設とそれに用いる新型炉の開発を表明した。福島原発事故以降の自民党政権の曖昧な原子力政策を大転換し、原発推進へ回帰したのである。この政策は無謀と言うほかないが、今号ではまず日本の原子力事業の現況、つまり『原発回帰の号令』の足元がどうなっているかを見ておく。

9月7日に日本原燃は、六ヶ所村再処理工場を予定通り本年度上期中に完成させることができず、新たな完成時期も示せないことを明らかにした。1993年の着工からこれで26回目の完成延期である。完成が遅れているだけではない。この間に建設費は当初の7600億円から3兆1000億円へと4倍に膨れ上がったし、建設と完成後の運転を担う日本原燃の能力欠如を伺わせる事態もいくつも発生している。

近年に限っても、規制委員会の審査に対応できない事態が頻発したり、試運転で発生した高レベル放射性廃液が約8時間にわたって冷却できなくなったりしている。着工からすでに30年近くたっており、完成以前に設備の老朽化が進んでいるとともに、職員の能力・技能、指揮・規律の劣化もすすんでいるようだ。

原発の使用済み核燃料は全量処理してプルトニウムを取り出し、それを高速増殖炉の燃料として使うというプルトニウム利用政策が日本の原子力事業の根幹である。しかし、その中心施設である高速増殖炉の開発は、この原型炉もんじゅの開発失敗ですでに頓挫している。プルトニウム利用政策はすでに破綻している。それなら、六ヶ所再処理工場の建設も断念すべきである。

しかし、そうはいかない二乗がある。六ヶ所再処理工場が稼働しないことになれば、すでに全国から運び込まれている使用済み核燃料は、青森県との取り決めによって各原発に返還されることになる。しかし、各原発にはそれを保管するスペースがない。

それどころか、各原発にはこの先の稼働によって発生する見込みの使用済み核燃料の保管スペースも十分にはなく、六ヶ所に運び出すことができなければ、早い場合は数年で使用済み核燃料の保管ができなくなり、原発の稼働が不可能になる。当座の原発の稼働を可能にするために、六ヶ所村での再処理計画を断念することは出来ないという倒錯した状況に陥っているのである。

さらに、原子力事業を担う人材の能力・技能、指揮・規律の劣化を示す事例が日本原燃以外でも頻発している。この1、2年だけでも東電柏崎刈羽原発のテロ対策のお粗末、関電経営陣の下請け業者との癒着、日本原電の地質データ書き換え、北海道電力のお粗末な対応をとがめた泊原発再稼働差止め判決などがその例である。

◆決死隊問題は逃げる。避難計画の実効性は検証しない！

実効性のある住民避難計画の策定と決死隊問題という、福島事故が提起した重要問題もまともにとりくまれていない。住民避難計画は原発周辺の自治体が作成するが、それぞれの計画の実効性を責任を持って検証する態勢がないので、ほぼすべてが形だけの計画に止まっているのが現状である。日本は人口が少ない所は概して地形が狭隘で起伏が多く、逆に地形が平坦な所は人口が多く、いずれにおいても苛酷事故の際の安全で迅速な住民避難は困難を極める。そのことが分かっているので、避難計画の実効性の検証はしないことにしているのである。

決死隊問題とは、苛酷事故発生時には事故のいっそうの深刻化を阻止するために大量被ばくを覚悟して作業にあたる決死隊の投入が必要になることである。福島事故の際には、東電は作業員の被ばく回避を優先して原発からの総撤退を行なおうとした。これは当時の民主党政府が禁じたので実行されなかったが、深刻な状況が発生すれば対処できるはずのない程度の職員を残しただけで、それ以外の職員を福島第二原発へ一時避難させることは行われた。

福島では幸運が重なったこともあって、決死隊投入が必要な局面は発生しなかったが、原発を運転すれば苛酷事故発生リスクは常にあるのだから、いざという場合に誰が決死隊投入を決断し、誰が決死隊として任務にあたるのかを事前に決めておく等の準備をしておかねばならない。しかし、そのようなことはどの電力会社でも一切行われていない。福島原発事故に関わっては、燃料デブリ取出しを核とする廃炉計画の実行可能性と妥当性も厳しく問われている。

◆ウクライナの教訓—頼りになるのは再生可能エネルギー！

最後にウクライナ位な戦争とのかかわりについて触れておく。この戦争による化石燃料調達困難化から原発再評価の意見が出ているが、化石燃料調達困難はしょせん一時のことである。他方でこの戦争は、原発は自爆型原爆になりうることを含め、外部からの様々な攻撃に対して極めて脆弱であることを明示した。

他方でこの戦争は、太陽光発電や風力発電は脱炭素エネルギーであるだけでなく、困難な状況下でも生き延びる力が強いことを再認識させた。緊急時に頼りになるのは屢星可能エネルギーだということである。ウクライナ戦争は原子力復権に肯定的な材料を提供してはいないのである。

以上が原発回帰大号令の足下の現実であり、それは日本の原子力事業はあらゆる面で命運が尽きていることを示している。いま求められているのは原発回帰ではなく、原発廃棄である。

◎東京・作品展・つなげる想い◎

＜七尾市大津・志田弘子＞記



10月18日（火）から23日（日）までの東京・神楽坂での作品展＜左写真、下は展示墨絵＞を無事に終えることができました。前日17日には、志賀原発のことをもっと知りたいとの急遽の企画で、西海漁協や橋さんや福浦での戦い・裁判について、お話しする場もありました。

思いがけない作品展は、金沢での、うたごえの祭典のポスター等から、東京のうたごえ合唱団の方が、昨年11月に能登まで訪ねてこられ、満蒙開拓、津島の開拓、原発事故による国策の棄民を合唱組曲へ、と語られた熱い想いから繋がったことでした。



いつか絵本の挿絵を？・・大きなテーマに驚きながら、それまでは、経験しない者が触れてはいけないと思っていた事を、もっと知りたい・・と、改めて手当たり次第、多くの本を読みふけりました。万分の一を知り得ただけでも、満蒙開拓・・戦争の悲劇、生き地獄のような逃避行等々・・胸をえぐられることばかりでした。そして春、福島・津島の原告団の方達と、帰宅困難区域である津島の地をくまなく巡り、深い緑の森や咲く花々に、改めて奪われたものの大きさ・かけがえのなさに言葉が見つかりませんでした。

戦争・原発・・国策による悲惨さを繰り返してはいけない、と込み上げる想いに、描かずにはいられなかった絵の数々と、それまでに自分の想いをなだめる為にも、仲間たちに支えられながら、一筆一筆染めずにはいられなかった染絵の前に、合唱団の皆さんや、福島、津島原告団の方達、テント広場や、映像や通信、それぞれが出来る事で今の方向を問うておられる方達、友人達やつなげてくださった多くの方達が足を止めてくださいました。

平和を祈り、行脚されていた90歳のお上人さんが、不自由な足を引きずるようにして訪ねて来られ、ハグをしてくれました。こんなに同じ想いの方々が集う場所に居させてもらっている・・と厳粛な感慨さえ湧き続けた毎日でした。皆が願う命や平和への想い・・どう表してゆけばいいのだろう・・改めて大きな宿題を頂いた気持ちです。

アベさんにたいする銃撃に対して思うこと



小出 裕章 元・京大原子炉実験所助教

アベさんが銃撃を受けて死んだ。悲しくはない。アベさんは私が最も嫌う、少なくとも片手で数えられる5人に入る人だった。アベさんがやったことは特定秘密保護法制定、集団的自衛権を認めた戦争法制定、共謀罪創設、フクシマ事故を忘れさせるための東京オリンピック誘致、そしてさらに憲法改悪まで進めようとしていた。彼のしたこと、しようとしてきたことはただただカネ儲け、戦争ができる国への道づくりだった。

アベさんは弱い立場の国・人達に対しては居丈高になり、強い国・人達に対してはとことん卑屈になる最低の人だった。朝鮮を徹底的にバッシングし、トランプさんには媚びへつらって、彼の言いなりに膨大な武器を購入した。彼は息をするかのように嘘をついた。森友学園、加計学園、桜を観る会、アベノマスク...彼とその取り巻きの利権集団で、国民のカネを、あたかも自分のカネでもあるかのように使い放題にした。それがばれそうになると、丸ごと抱え込んだ官僚組織を使って証拠の隠ぺい、改ざん、廃棄をして自分の罪を逃れた。その中で、自死を強いられる人まで出たが、彼は何の責任も取らないまま逃げおおせた。私は彼の悪行を一つひとつ明らかにし、処罰したいと思ってきた。

私は一人ひとりの人間は、他にかけがえのないその人であり、殺していい命も、殺されていい命も、一つとして存在していないと公言してきた。アベさんにはこれ以上の悪行を積む前に死んでほしいとは思ったが、殺していいとは思っていなかった。悪行についての責任を取らせることができないまま彼が殺されてしまったことをむしろ残念に思う。

多くの人が「民主主義社会では許されない蛮行」と言うが、私はその意見に与しない。すべての行為、出来事は歴史の大河の中で生まれる。歴史と切り離して、個々の行為を評価することはもともと誤っている。そもそも日本というこの国が民主主義的であると本気で思っている人がいるとすれば、それこそ不思議である。

国民、特に若い人たちを貧困に落とし、政治に関して考える力すら奪った。民主主義の根幹は選挙だなどと言いながら、自分に都合のいい小選挙区制を敷き、どんなに低投票率であっても、選挙に勝てば後は好き放題。国民の血税をあたかも自分のカネでもあるかのように、自分と身内にばらまいた。原子力など、どれほどの血税をつぎ込んで無駄にしたか考えるだけでもばかばかしい。日本で作られた57基の原発は全て自由民主党が政権をとっている時に安全だと言って認可された。もちろん福島第一原発だって、安全だとして認可された。

その福島原発が事故を起こし、膨大な被害と被害者が出、事故後11年経った今も「原子力緊急事態宣言」が解除できないまま被害者たちが苦難にあえいでいる。それでも、アベさんを含め自民党の誰一人として、そして自民党を支えて原発を推進してきた官僚たちも誰一人として責任を取らない。もちろん裁判所すら原発を許してきた国の組織であり、その裁判所は国の責任を認めないし、東京電力の会長・社長以下の責任も認めない。どんな悲惨な事故を起こしても誰も責任を取らずに済むということをフクシマ事故から学んだ彼らはこれからもまた原子力を推進すると言っている。さらに、これからは軍事費を倍増させ、日本を戦争ができる国にしようとする。

愚かな国民には愚かな政府。それが民主主義であるというのであれば、そうかもしれない。しかし、それなら、虐げられた人々、抑圧された人々の悲しみはいつの日か爆発する。今回、アベさんを銃撃した人の思いは分からない。でも、何度も言うが、はじめから「許しがたい蛮行」として非難する意見には私は与さない。〈7月9日、札幌行航空便上で記す〉